A Child's History of Fluxus

Dick Higgins

Long long ago, back when the world was young – that is, sometime aroung hte year 1958 – a lot of artists and composers and other people who wanted to do beautiful things began to look at the world around them in a new way(for them).

They said: "Hey! – coffee cups can be more beautiful than fancy sculptures. A kiss in the morning can be more dramatic than a drama by Mr. Fancypants. The sloshing of my foot in my wet boot sounds more beautiful than fancy organ music."

And when they saw that, it turned their minds on. And they began to ask questions. One question was: "Why does everything I see that's beautiful like cups and kisses and sloshing feet have to be made into just a part of something fancier and bigger? Why can't I just use if for its own sake?" When they asked questions like that, they were inventing Fluxus, but this they didn't know yet, because Fluxus was like a baby whose mother and father couldn't agree on what to call it – they knew it was there, but it didn't have a name.

Fluxus is almost twenty years old now – or maybe more than twenty, depending on when you want to say it began – there are still new Fluxus people coming along, joining the group. Why? Because Fluxus has a life of its own, apart from the old people in it. It is simple things, taking things for themselves and not just as part of bigger things. It is something that many of us must do, at least part of the time. So Fluxus is inside you, is part of how you are. It isn't just a bunch of things and dramas but is part of how you live. It is beyong words.

1979 Horizons: The Poetics and Theory of the Intermedia

２００５年度　森村・川村ゼミ
１０月１９日
藤村・元島・深井
Chapter 3 Experience in Context: Happenings, Conceptural, Pop Art

【はじめに】
これまで二回に渡って、フルクサスのアーティストを中心に実践的な活動をみてきたが、未だにその招待を掴みきれていない部分がある気がする。フルクサスの語源となる、Fluxu という言葉が、「流動」や「変転」を意味するように、フルクサス自体を見ていくだけでは捉えにくく、複雑であったように思える。そこで、１９６０年代から１９７０年代という激動の時代の中、フルクサス周辺で起きていた3つのアート活動：ハプニング・コンセプチュアルアート・ポップアートとの関係性を見ていくことで、よりフルクサスの正体に迫ることができるのではないだろうか。

【Happenings】
◆ハプニング
1958 年　A. カプロー[18 Happenings in Six Part]から由来する呼び方

・アクションペインティングや抽象表現主義の影響
At a certain moment the canvas began to appear to one American painter after another as an arena in which to act. What was to go on the canvas was not a picture but a event.
Harold Rosenbarg, The American Action Painters in Art News

・一回性、偶然性を重視

・everything else
　→アート以外の、生活に関わるすべてのもの

◆ハプニングとイベントの類似点
・舞台、役者、観衆、リハーサルなど多くの要素を除外
・五感への自覚を新たに高める
・「よりリアリスティック」に
Dick Higgins, George Brecht らもフルクサスとの関連性を主張

◆初期ハプニングとイベントの相違点
ほとんどのフルクサスメンバーは双方を区別している
ハプニング：表現主義的、抽象主義的

A.Kaprow [18 Happenings in Six Part]

イベント：非表現主義的、非抽象主義的、自由形態
T.Schmit [Zyklus]

【Concept Art—Conceptural Art】
◆コンセプチュアルアート（概念芸術）
・1961 年　Henry Flynt が「コンセプトアート」という言葉を始めて用いる
"Concept art is first of all an art of which the material is concept. Since concepts are closely bound up with language, concept art is a kind of art of which the material is language."

・主眼は形や素材ではなく、思想や意味
　→それまでのフォーマリズムに対する批判

・「芸術とは何か」その問いかけの方法が定義をなしている
　→その問いを投げることが、文化や社会に内在する価値そのものに疑問を呈する

・時代背景—政治と制度に対する反動—
　→当時の政治状況、アート界の制度的な状況設定に対する批判

◆Ex: Joseph Kosuth [一つの、そして三つの椅子]
Seth Sieglaub　展示カタログに関して、"PRIMARY" information
Daniel Buren [Travail in situ]

◆フルクサスとの関係
P.121 "Fluxus work is a concept art, but not a conceptural art in the commercial sense."
「コンセプトアートであるが、コンセプチュアルアートではない」

<u>◆フルクサスがコンセプトアートである理由</u>

・"the material is concept" "the material is language" (Simplicity)
　コンセプト（概念）素材となる　　言語を素材とする類の作品

<u>◆フルクサスがコンセプチュアルアートではない理由</u>

・制度的文脈に対する批判（初期段階では見られるが）の目的が明確ではない

・コンセプチュアルアート　″disembodied″概念を非具体化、脱物質化
↑
↓
フルクサス　″embodied″経験という概念を具体化

・コンセプチュアルアートの、言語の科学的実証とミニマリズムの形式を否定

・商業的な意味合いとしてのコンセプチュアルアートではない

◆Ex: Henry Flynt [Down with Art]
Alison Knowels [Bean Rolls]
Meiko Siomi [Sapital Poem No.1]
Yoko Ono [Cut Piece]

【Pop Art】
◆ポップアート
１９６４年　フルクサスのアーティストであった R・Watts コンセプチュアルアートに対して起こしたのが始まり

◆Pop Art を High Art に
→R・Watts は大衆のイメージする商品に Pop の像をなぞらえるだけでなく、Pop Art が日常の必需品と区別されてブランドネームからアートに変化する時に、Pop Art も High Art に成り得るのではないかと考えた

Ex:リチャード・ハミルトン
[いったい何が今日の家庭をこれほどまでに変え、魅力的にしているのか]
→Pop Art はアメリカ中産階級文化ののんきなパロディ

◆フルクサスとの関係
・大量生産の中にある流動的で美的な効果
→Pop Art としての領域と固有性を持つことを R・Watts が交渉し始める

＜Concrete Experience の違い＞
・Pop Art　より一般大衆に根ざす日常性　→商業的
・Fluxus　個人の感覚に根ざす日常性(Simplicity)　→非商業的

→消費者をメインとした要素を押し出すことでアメリカの Pop Art は Fluxus Pop の特性から離れていってしまった

【考察】

そもそもフルクサスとは何だったのか。マチューナスが組織図を作り取りまとめようとしたものの、フルクサスのメンバー構成は流動的で一時的な関わりだけの人や、他のアート活動にも関わっていた人が多かったことから、その正確は容易にはつかめない。今回の発表で同時代における三つのアート活動との関係をみてきたことで、その正体を突き止める手がかりを発見できた。

その一つとして、フルクサスは常に芸術を日常の領域へと溶け込ませることを実践していたが、ここで意味する「日常」とはポップアートのような商業的で、一般大衆に向けられた日常ではなく、取るに足らないと思われてきた「日常」についての表現に転換したのである。また、このようにして日常の断片的なシーンや生活用品を用いながら、個々に内在する感覚を呼び覚ますものであったと言うこともできる。私たちはこのような「日常」を突きつけられたとき、妙な親近感とおもしろさを感じて、自分の日常に対して新しい発見をみつけてみたいというポジティブな気持ちにさせてくれる。

もう一つは、フルクサスは比較してきた3つの活動のどれにも属さないということである。それは従来のアートに対する反発としてうまれたものでもなく、継承したのでもない。
Ay-O はフルクサスから受けた一番の影響は、「アーティストと普通の日常のことを区別しなくていい、芸術かどうかは考えなくていいのだ」ということだと述べている。彼の言葉からも分かるように、フルクサスはアートという大きな括りからはずれ、また個々にその価値はゆだねられ、ありのままで自由なスタイルであったといえる。60年代を生きたフルクサスグループだが、その言葉自体が示してくれているように、フルクサス精神は受け継がれ、今もなお形を変えながら存続しているのではないだろうか。

【用語集】

◆アクションペインティング
アメリカの批評家ハルロド・ローゼンバーグが 1952 年に発表した論文「アメリカのアクション・ペインターたち」の中で提起した言葉。代表的なアーティスト、ジャクソンポロックは「行為する場」としてのキャンバスにドリッピングという手法で、抽象主義絵画の本質に挑んだと言われている。

◆18Happenings in Six Part
室内空間を細かく仕切り、それぞれの空間で一見何の脈絡もない出来事を演出し、観客にその読解作業を強いた。

◆フォーマリズム
内容に対して形式を重視し、形式的要素から作品を解釈しようとする美学的傾向。現代のフォーマリズムの概念はC・ベル、R・フライ、C・グリンバーグらによって確立された。20世紀初め、イギリスのベルとフライはアーティストの意図や社会背景よりも視覚上の作品

の形式的特性によって美術史を分析しようとした。第二次世界大戦後、アメリカのグリーンバーグは形式の内在的自己批評による還元のモダニズム論によって美術批評家や当時のモダニストに多大な影響を与えた。

◆ミニマリズム
ミニマリズム(Minimalism)とは、「最小限の」という意味であり、いくつかの分野にまたがって使用される概念・用語・様式。いくつかの分野でしようされるが、今回の発表では美術・建築など造形芸術分野においての用語。’60 年代から使われだした言葉で、余計な装飾を極限まで切り詰め、徹底的に抽象化して表現する様式。

【参考文献・サイト】
・hannah Higgins 『Fluxus Experience』Ahmanson—Murphy Fine Arts Book S.2002
・『フルクサス展—芸術かた日常へ—』うらわ美術館・2004
・『コンセプチュアルアート』岩波書店・2001

・fluxus deBris@Art / not Art
http://www.artnotart.com/fluxus/index2.html